

論文内容要旨

Indication and Usefulness of Bile Juice Cytology

for Diagnosis of Gallbladder Cancer

(胆嚢癌診断における胆汁細胞診の適応と有用性)

Gastroenterology Research and Practice, 2018,

Article(5410349):6, 2018.

指導教員：茶山 一彰教授

(医系科学研究科 消化器・代謝内科学)

齋 宏

Introduction. 近年の画像診断の進歩により、胆嚢癌の画像的特徴が明らかになってきた。しかし実際の臨床現場では診断に悩む症例も数多く経験する。胆嚢隆起性病変は、肉眼的に有茎性と広基性に大きく形態分類される。Endoscopic transpapillary gallbladder drainage (ETGD)を用いて採取された胆嚢胆汁細胞診が診断に有用であるとの報告がなされているが、その適応や意義についてはいまだ不明な点も多い。今回我々は、胆嚢隆起性病変の良悪性診断における胆汁細胞診の診断能について、採取部位、採取方法、肉眼形態別での診断能を検討し、胆嚢胆汁細胞診の適応と有用性について検討した。

Methods. 2000年4月から2017年3月で病変が胆嚢内に限局した162症例を対象とした。まずERCで胆管胆汁細胞診の診断能を検討し、続いてETGDを留置し初回吸引細胞診の診断能を検討した。その後ETGDを用い、洗浄吸引細胞診の診断能を検討した。最後に合併症について検討した。

Results. 最終診断は腺癌33例、腺腫10例、ADM63例、非腫瘍性ポリープ35例、慢性胆嚢炎21例だった。胆管胆汁細胞診の感度は3.6%、胆嚢胆汁細胞診の感度は59.1%であった。胆嚢胆汁の採取方法別の細胞診の診断能は初回吸引細胞診で感度は38.9%、洗浄吸引細胞診の感度は73.3%であった。形態別、採取別胆嚢胆汁細胞診の検討では有茎性病変では全例診断できていないのに対し広基性病変の初回吸引細胞診の感度は38.9%、洗浄吸引細胞診の感度は73.3%と上昇した。偶発症は162例中で閉塞性黄疸が1例、急性胆嚢炎が3例、急性膵炎が9例、胆嚢穿孔が1例の合計14例(8.6%)に認めた。

Discussion. 今回我々は胆嚢隆起性病変の良悪性診断における胆汁細胞診の有用性について検討を行った。まず胆汁採取部位別の診断能の比較検討であるが、胆管胆汁細胞診の感度は3.6%と低値であったのに比べ、胆嚢胆汁細胞診では、感度は59.1%と上昇した。この結果からまず、胆嚢癌の良悪性の診断は、より病変に近い胆嚢内から検体を採取すべきであると考えられた。次に肉眼的形態別における胆嚢胆汁細胞診の感度について検討を行った。有茎性病変での感度は0%であったのに対し広基性病変の感度は50%であった。さらに我々は広基性病変における胆嚢胆汁採取方法別の診断能の比較をした。広基性病変の初回吸引細胞診の感度は38.9%であったのに対し、ETGDを用いた洗浄吸引細胞診の感度は73.3%と感度が上昇した。洗浄を加えることにより新鮮な剝離細胞が得られることが推測される。また今回の検討で、有茎性病変の胆嚢癌では採取部位が胆管、胆嚢を問わず診断できていない事が判明した。有茎性病変の悪性病変は全例腺腫内癌であり、悪性病変の占める腫瘍ボリュームが少ないことがその要因として考えられた。以上の結果を考慮すると、有茎性病変で画像所見から悪性病変が疑われる場合、ERCは合併症の観点からも不必要と考えられ、速やかにLaparoscopic cholecystectomyを行うべきであると思われた。一方、広基性病変の胆嚢癌診断に対して胆嚢胆汁細胞診、特にETGDを用いた洗浄吸引細胞診の有用性は非常に高いと考えられる。そのため胆嚢癌が疑われる広基性病変の症例については各種画像診断に加え、胆嚢胆汁細胞診による良悪性の診断を検討し、慎重に術式を選択すべきである。今回の我々の検討において偶発症は162例中で閉塞性黄疸が1例、急性胆嚢炎が3例、急性膵炎が9例、胆嚢穿孔が1例の合計14例(8.6%)に認めた。しかし致命的な合併症はなくチューブ抜去や保存的加療により全例軽快した。